

小板橋

をい 18 章一子
集 正 編 集 者
2016. 9. 18 代 本 問 編 集 者
= 宮 谷 順 石 林 市
= 顧 萬 務 局 編 集 者
= 事 務 局 編 集 者
= 大 富 田 山 台 1-18-15
津 々 山 台 1-18-15
0721-29-1576

古 家 物 語 杉山好彦 著 (一)

会 員 萬 谷 順 一

この書は單なる古家の説明書ではなく、三高・東大に学んだ杉山孝子さんの次男杉山好彦氏（大正四年三月三十日生、昭和三十一年三月四日死）が、昭和二十六年に記した、先祖が残された大きな遺産としての杉山家についての随筆集である。それは先祖に感謝しつつ、建物や庭等の諸々の設備、調度品を説明し乍ら、杉山家の生活にふれ、自分の所感をのべかつ詳細な説明を加えるという貴重な評論である。読者は好彦氏の人柄を察し乍ら杉山家の営みを知ることができる。では最初から順を追って内容を説明する。たゞ時間が限られているので要約に止まることをお許し願いたい。

杉山好彦氏は冒頭にこうのべている。

眞善美の一致

綜合美探究の見地から祖先の残してくれた遺産を眺めてみるのも決して決して無意味ではなからうと。

一 大 和 棟

今日の家の屋根に比べ 遙かにどつしりとした重量感がある。重なり合った棟も適度の比例を見せているが それはその下で営まれている生活機能の平面図を見れば成程と肯ける事である。

二 忍 び 返 し

竹槍の様に、鋭くそいだ尖先と、それに打込んだ五寸釘の列が黒く不気味な物々しさを感じさせるが、倉や本家の大きな骨組を適当な高さの釣合いを保ちつつ、強く黒い一線を引締め乍らよく安全弁の役目を果たしたかと思うと何かしら微笑ましいものさえ感じられる。

西側のは先年のジェーン台風で吹飛んで了ったが南のはまだこうして健在である。この時の台風の被害は相当なもので附近の低い新しい家の棟瓦等木の葉の様に舞った中に、粘土の力がなくなつて今にもつり落ちそうに見えたこの家の屋根が、瓦一枚の破損も見せないで高く聳えている姿は何かしら古武士の風格さえ偲ばせる。力学的に優れているのか、材料の吟味か、或いは施工の親切さか、恐らく重要な部分の瓦か、殊に末端のそれが何十年に一度かは訪れるであろう四、五十米の風速にも容易に浮上らない丈の重さを備えている爲ではなからうか。白壁とその下際の接合部の瓦の接目が漆喰で塗り固められているのがこの頃田舎を歩いていて新築の農家の屋根にケバ／＼しい幾何学模様を示しているのを不思議に思っていたがやはりこういう自然の脅威から来た必然性から来たものらしい。

三 煙 出 し

農村のなごり煙出しの櫓も時代的遺物として大屋根を飾っているにすぎないが、單調な主棟の一つのアクセサリーである。

四 三 和 土

店の人口で入ると土間は三和土になっている。三和土は細かい土に、石灰を混ぜ固めたもので相当固くはあるがモルタル程ではない。商家の客を迎える店の間の中庭となっていた。大正の初めまでは年貢を納めに来る農民は、この土間にしゃがみ、上り框に手をかけるのみで、決して腰をかけなかったという事である。

五 上 段

店から上ると三段に順次上って行く。店八畳の間を通り、次の間四畳は一段高く、更に格子の間へと上るに従い部屋の感じが変り何かしら次第に改まらせる。心理的效果がある様に思われる。格子の間へ出るとせまい乍らも張出した椽附きの十畳となり、高さ二尺にも余る大きな鴨居も見せて、ここ迄が常の部屋であり、その生活の主体は北半にある。明るい南北のこの三部屋は事務室或いは客間として使われたものであろう。

これより奥は同一平面に發展しているが、特別の客間として使われた。

重い板戸を開いて玄関に出ると三尺の濡縁と沓拔ぎがある。

正式の客を迎える入口であるが一寸外からは気付かれない様に切つてある。

六 格 子 の 間

細い格子戸も日本建築の持つ美的要素の一つであらう。それはガラスという便利なもののなかった時代に戸締りと採光と通風と、更にレースカーテンの利便をも兼ね備えた一種の隠れ蓑としての役割を持ったものであったかもしれない。

この部屋の鴨居にかけられた槍や薙刀や袖がらみの千段巻が真珠色の鋭い光を放っている。それはいつの頃からのものかは知らない。

七 佛 間

家の中心に佛間がある。＂甘露城＂の額の下に真正面に二尺余寸の狭い襖が四枚並んでいる。これを片寄せると普通には見られない大きな佛壇が現れる。冠婚葬祭全てを自家で行った時代は、この家でも四畳の佛間を中心にして正面十畳の玄関が表まで伸び、向かつて左が大床の十二畳の間から奥の客間へと続き、右手は家族や、別家、出入りの為の八畳が二間もとれる。即ち佛壇の線より前だけで椽側も入れれば五十畳にもなり優に三百人が着座し得る。序に祖父の亡くなった折の葬儀録の一部を抜き書きしてみると、手伝東林町・西林町・森井コスエ以下三七三人夜伽十八日夜御導師、別院、穴倉善照以下二三人



明治四十四年五月一七日ヨリ二十一日迄
御会葬者 三八一名
表侮受 一〇六名
他所休憩所 全賄所 中村氏宅借用
計 白米入用、高一五石五斗（二二五kg） 費用総計 一八二二円三六銭五厘
手伝 町内三七三名 寺院関係一六〇名
家族・別家・召使その他 二五名 他所侮凡ソ二六〇名
合計 八九八名
葬儀 仕揚げ料理献立数 九百個
三重折詰外二膳（飯汁酒当方賄）
とあり盛儀の程が偲ばれる。尤もこの祖父は奇行も多く信望もあり、未だに土地の語り草になっている。過去帳に記された母の筆を借りれば

釋教守 俗名 杉山團郎正美戸主

安政四年十一月二十八日、父教庸（長一郎正本）が長男と生る。母妙律（艶子家主）に幼くして別れて代々酒造るなりはひの家に祖母（悲境の中に生い立ちて家運の隆盛をはかりし女丈夫、光峰本名ミネ）の手一つをちからと人となつて後、明治十年妻を河澄家より入れて波子（長一郎弟雄次郎長女）と呼ぶ。一四年二月二十五日家名相続して自来、日清日露二回の戦役を彩りし文明の時流は流れながれて変転きわまりなき社会に交りて磊落の性またよく自己を没せず後年次女清子早世の日より深く 佛教を信心す。

四十四年の暮春 胃の病を發して五月十七日午後十一時半永眠享年五十五才

一男二女あり長男は一四年生当日死亡 長女孝子配偶者を大和片山氏より迎ふ。二女清子三七年大谷氏へ嫁ぎ二十一才にて死亡。

葬式列	
明治四十四年五月一日	明治四十四年五月一日
明治四十四年五月二日	明治四十四年五月二日
明治四十四年五月三日	明治四十四年五月三日
明治四十四年五月四日	明治四十四年五月四日
明治四十四年五月五日	明治四十四年五月五日
明治四十四年五月六日	明治四十四年五月六日
明治四十四年五月七日	明治四十四年五月七日
明治四十四年五月八日	明治四十四年五月八日
明治四十四年五月九日	明治四十四年五月九日
明治四十四年五月十日	明治四十四年五月十日
明治四十四年五月十一日	明治四十四年五月十一日
明治四十四年五月十二日	明治四十四年五月十二日
明治四十四年五月十三日	明治四十四年五月十三日
明治四十四年五月十四日	明治四十四年五月十四日
明治四十四年五月十五日	明治四十四年五月十五日
明治四十四年五月十六日	明治四十四年五月十六日
明治四十四年五月十七日	明治四十四年五月十七日
明治四十四年五月十八日	明治四十四年五月十八日
明治四十四年五月十九日	明治四十四年五月十九日
明治四十四年五月二十日	明治四十四年五月二十日
明治四十四年五月二十一日	明治四十四年五月二十一日

市民公開講座当日のA3葬式列表を一枚附録

八 大 床

ここまで来て始めて床の間がある。而もそれが民家としては一寸桁外れた大きな櫃の一本である。後は老松を右寄りに画き能舞台を模して作られたものであると伝え聞いている。

九 襖 絵

二間の大床に並んだ一間、十二畳の板戸は丁度大床裏に当たる茶席への通路と半間の水屋になっているが、松にみみづくの板戸の絵は相当に薄れずと年代も古いものらしい。南側障子を開けると廊下が玄関の切戸や手洗いへと続き、北側の四枚の襖の奥は更に書院へと拡がっている。この襖は梅に鴨芦に雁の絵で大床の老松や、仏間の鳳凰、更に奥の間の山水と共に全て狩野散人杏山子守明の落款がある。併し最も素晴らしいと思うのは大床に向する西面六枚の絵襖である。『浪に千鳥』のその一羽宛が実によく画けており岩から飛び立った一群の画く孤が今にも羽音高くふくれ上がらんばかり実に動的な感銘を与える。母の筆名『石川の夕千鳥』も案外こんな幼い日の夢に通う何物かが無意識の中にあつたのかも知れない。

欄間の細い線が真夏の強い陽射しを天井に反射して奥まった北側の部屋の涼しさを思わせる。欄間の複雑な彫刻よりもシルエットとして見る時、本当の美しさがある様だ。

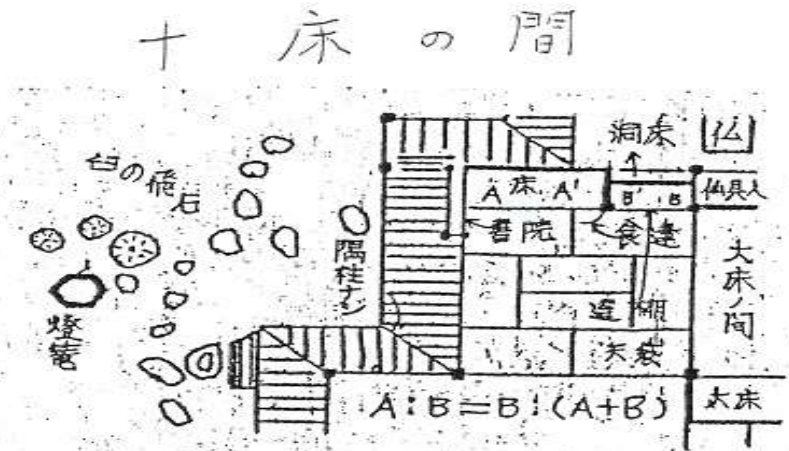
因みに各部屋の欄間は皆違った構図をとっていることも、こうして見上げて初めて気付いた事である。

十 床 の 間

八畳の床の間と、違い棚が巾、高さ、深さ共美しいプロポーションと以て作られ間に開けられた火燈窓も片寄せられて鮮やかである。

床の間には掛物を掛け花を生ける可きものと決めている人が多い。床の間というものはその昔僧侶の壁に掛けた仏画を礼拝する為にその前に並べた香華等が次第に固定化し進化したのであるから祭壇的装飾が源流に違いないが、一度茶禪の洗礼を全て来た床の間は極度に鈍化された美の世界でありそこには完全な調和が要求される。

(つづく)



石上露子の浪華婦人会での活動(二)

会員 楫野政子

今回は日露戦争下の幼児保管所に関する露子の作品をみた。もうひとつ、露子の婦人会での重要な役割は、浪華家政塾卒業式での幹事を代表しての祝詞朗読である。一回から三回まで明治三十八年から四十年まで、彼女は祝詞を書き、朗読した。日露戦争下で設立された和洋料理塾が浪華家政塾として整備され、第一回卒業生を出したのは明治三十八年である。「かへさの道」に書かれる十月二十九日の出来事は、第五回秋季茶話会と第一回浪華家政塾卒業式が同時に行われた日のことである。露子の独特の美文によって語られるなかに、「なの字」や「お高僧」という人物が登場する。彼女たちは、露子が親しくしていた浪華婦人会の女性であることが、これも日露戦争下で活発化した読者欄「友信欄」によってわかる。この仲間たちとの交流が露子に与えた影響も大きい。『石上露子全集』には取られていないが、第二回卒業式でも彼女は祝詞を読んでいる(明治三十九年四月第六〇号)。この卒業式後の懇親会の記事では、清水谷高等女学校長の演説や、バイオリンや琴の演奏などの小音楽会が催されたことがわかる。質素な服装を喜ぶ旨も記されている。会員に質素な服装を奨励することもまた、「如何なる有名な婦人学者にても、慈善的事業なれば(機関紙の)原稿料は出さず」、「同志の人」であれば「貴賤の別なく入会を歓迎」した、浪華婦人会の目標に沿うものであった。当時の貴顕を会長に押し戴くような婦人会とは一線を画したものであった。だからこそ、露子の第三回卒業式「開き文 君がゆく道」と題して(明治四十年四月第七一号)露子の卒業生に向けた進歩的なメッセージも書かれたのではないだろうか。そこでは同年一月の「あきらめ主義」において、女性に植え付けられたあきらめ主義や良妻賢母主義批判と同様の「人の妻となり人の母となるのみが婦人の天職にても候まじくや」「あくまで自己を忘れず奮進したまふべき」「自己は生命なり」といった卒業式の祝辞にはむしろ似つかわしくない言説がある。後の青鞥のグループや大正期の与謝野晶子の思想などを先取りしたかのような考えが披瀝されている。露子の人生観・結婚観に関してはここでは論じきれないが、自ら編集にあたった『婦人世界』という狭い媒体の中でこそ言えた露子の思いであつたらう。それは、幼児保管所や家政塾の運営といった、名士夫人として振る舞わざるを得ない愛国婦人会では経験できなかった具体的な慈善の諸相に行き当たったからこそ彼女が得た社会性でもあった。



彼女は確かに自家杉山家の小作の状況を見聞きし、自省的な感想をもらしていた。しかし、深窓にこもる詩歌三昧の生活も可能であつたはずの彼女を解き放つたのは、やはり、婦人会での諸活動ではな

かつただろうか。

浪華婦人会の事務所は南区末吉橋通四丁目にあつたが、そこから直線距離で一キロ強に幼児保管所のある難波鉄眼寺がある。婦人会会員の多くは大阪市内に居住していた。露子はおつて幼い日に過ごした大阪に愛着もあり、あちこち行き来したのではないだろうか。富田林から河南鉄道で柏原まで出、そこからは関西鉄道で湊町に向かい、あとは人力車を使ったのであろうが、この片道二時間余を行き来するのは、いかに若い女性であれ、確かな目標を持たなければ持続しなかつただろう。

先述した「あきらめ主義」では慈善運動そのものに関しても鋭い指摘をしている。富裕層が貧困層に慈善を施すのは、「取つたものを返す」当然の行為であり、なんらほめられるものではないとの、社会主義者的思想を述べる。こういった考えも、現実の庶民層を目の当たりにした経験に裏付けられるものであつて、『平民新聞』を読んでいただけで、実際の社会を見ていなければ書けないことではないだろうか。

そして「慈善」そのものを否定したのではなかつたからこそ、明治三十九年におきた東北三県の凶作の惨状に、彼女自身が主宰をして、大々的に義捐音楽会を開催したのである(明治三十九年三月二十一日)。音楽会のプログラムまで紹介されている。それによると、露子と親交を結んだばかりの京都の鈴木鼓村が、箏曲を披露している。そもそも、露子のことを長谷川時雨に語つたのは鼓村であつた。そのことから時雨が『読売新聞』で「明治美人伝」中に露子を取り上げ、露子の名と「小板橋」が世に広まるきっかけとなつた。興味深いことに、そのころ『大阪朝日』の記者であつた松崎天民も長詩を吟じている。天民の著書『万年筆』中の「蜚カラ列伝」に鈴木鼓村が登場しているのも、彼らの交流がうかがえて面白い。さらに、大阪第四師団直属の陸軍軍楽隊が何曲か演奏している。ヴェルディのオペラ曲の演奏など、明治期、和楽から洋楽へという変遷をあらわすものとしても興味深い。

露子は浪華婦人会機関誌の編集では主役を演じ、慈善活動でも主役や脇役をこなしながら、社会活動に青春の一時期を費やしたのである。ロマンチックな歌人としての側面、自我に目覚めた近代的女性、結婚後は地主の妻として、色々な面をもつとされる露子を支える一つがこの婦人会での行動する露子の心性であつたと思われる。

例会予定のお知らせ

十月 例会

日時 十月 九日(日) 午後一時より
場所 中央公民館 (予定)

テーマ

講師 「小夜千鳥・河内梅子」について

講師 文学散歩予備学習 楫野政子氏

講師 師 小坂橋短歌会詠草の合評 久保満夫氏

助言 高石志奈枝氏

披露 石上貴栄子氏

小坂橋短歌会への詠草は二十日までに一人一首 事務局まで